
殺人者には100万円

ゴンギツネ

タテ書き小説ネット Byヒナプロジェクト

<http://pdfnovels.net/>

注意事項

このPDFファイルは「小説家になろう」で掲載中の小説を「タテ書き小説ネット」のシステムが自動的にPDF化させたものです。この小説の著作権は小説の作者にあります。そのため、作者または「小説家になろう」および「タテ書き小説ネット」を運営するヒナプロジェクトに無断でこのPDFファイル及び小説を、引用の範囲を超える形で転載、改変、再配布、販売することを一切禁止致します。小説の紹介や個人用途での印刷および保存はご自由にどうぞ。

【小説タイトル】

殺人者には100万円

【Nコード】

N8219X

【作者名】

ゴンギツネ

【あらすじ】

ボスが3人に殺人を命令した。「五人だ。五人殺せ」命令された人はどうするのか。殺人を犯した人は、何を思うのか。1ヶ月に一回更新できれば良い方だと思います。

始まり

ボス・・・・・・・・冷酷さ

・・・・・・・・力

・・・・・・・・金

・・・・・・・・頭の良さ

34歳。組織スカイキラー（空の殺し屋）のボス。基本的に悪い人。

石間和人・・・・・・・・冷酷さ

・・・・・・・・力

・・・・・・・・金

・・・・・・・・頭の良さ

26歳。臆病者。頭の良さを買われてスカイキラーにはいった。

唐沢雄太・・・・・・・・冷酷さ

・・・・・・・・力

・・・・・・・・金

・・・・・・・・頭の良さ

23歳。元から、暴力が好きだったので、スカイキラーに入団。

東村大介・・・・・・・・冷酷さ

・・・・・・・・力

・・・・・・・・金

・・・・・・・・頭の良さ

17歳。スカイキラーのメンバーの一人目。【2年前の事件】とともに、荒れていった。殺人もしたことがある。

山川里美・・・・・・・・冷酷さ

・・・・・・・・力

・・・・・・・・金

・・・・・・・・頭の良さ

22歳。警察官。交渉事が、結構得意。東村の過去の事件を知る人。東村が信用する、ただ一人の人。

「五人だ。五人殺せ」ボスはワイングラスを右手に持ち、口元に持っていた。

「五人？本気ですか？」驚きの混じった声が出た。

もう一人は、顔が引き攣るのを感じながら言った。「五人も殺せば

言葉は、最後まで言えなかった。冷酷な声が、彼の言葉を遮ったからだ。

「本気、だ。今から、抜けるか？」

背中が、震えた。彼には、その言葉が暗に、抜ければ殺す。と言っているように聞こえた。逆らうな。本能が叫び声をあげた。

緊張感が、この部屋を圧迫する。

その雰囲気消すように、ボスは、ふつと、頬を緩ませて言った。

「一人につき百万やろう。合わせて五百万だ。それじゃあ、解散」

石間和人は、真剣に悩んでいた。今思うと、あの部屋に居たのが、夢だったら良かったな、と思った。現実逃避をしても、仕方ないことは、分かっていたが、認めたくはなかった。悩んでいても、仕方がない。腕組みをしている手を組みかえようとした時、運命は決まっていたのかもしれない。手が、人に当たった。

「あ、すみません」

頭を軽く下げ、立ち去ろうとした時、肩を掴まれた。

「おい、兄ちゃん。俺は、ここら辺を取り締まっている松坂豪だぞ。覚悟はできているだろうなあ？」

無視をして、立ち去ろうとした時、頬に拳がめり込んだ。

「シカトかあ？ふざけているのか？おいっ！」

正当防衛。この単語が、頭の中にちらついた。そうだ、このままでは、殺される。これは、正当防衛だ。突然、頭の中のスイッチが押された。和人は、近くにあった焼酎の瓶で、松坂の頭を殴った。叫び声の後、急に、松坂はおとなしくなった。しかし、殺すためには、もう一回殴らなければ。殴打になってしまったのは、警察の不振を買うかもしれないが、精神が、錯乱していたと思わせればいい。骨の硬さの後、柔らかな感触。瓶を放す。血が、糸を引いた。後頭部が、少し、へこんでいる。予想していたのより、血が出ていなかった。逃げよう。シナリオは、松坂に肩がぶつかったときに、謝罪したのに暴力を振われた。殺されると思ったので、近くにあった瓶で殺してしまった。逃げたのは、殺してしまった動揺から。・・・俺は、悪くない。

被害者NO.1

被害者・・・松坂豪（27）暴力団の一員。

死因・・・撲殺。

凶器・・・ガラスの瓶。

石間和人、獲得賞金百万円。殺害数一人。

山川里美は、頭を抱えていた。この町で起きた殺人事件の犯人が、まだ見つからないのだ。おまけに、被害者が、暴力団のボスだったことから、上司も事故だったのではないかと言いだすし。どうやったら、事故で、殴打されるのか。焼酎の瓶がそんなにいいタイミングで（よくはないが）落ちてくるのか、を上司に聞いてみたい。暴力団だって、殺せば殺人だ。分かっているのだろうか。

・・・まあ、たしかに最近、事件が減ってきたが。あの暴

力団、万引きから麻薬まで、幅広く活動していたみたいだ。しかし、今回の事件は、本当にシンプルだ。つらつらと考えていると、電話がきた。

「……もしもし、山川です。どうしましたか？まさか、あの事件が、事故だったなんてことはないですよね？……どうやったら、事故で、殴打されるのか。焼酎の瓶が、そんなにいいタイミングで落ちてくるのかを聞きたいものです」

すごく早い口調で、一方的に話す。

「いや、その犯人が、自首してきた」

「はい？もう一回言ってもらえますか？」

「いや、その犯人が、自首してきた」

「……一字一句変えずに言ってきた。しかも、見事なまでの棒読みである。最初の方が、感情がこもっていなかった。いや、問題はそこじゃなくて。」

「自首？どうしてまた？」

「詳しいことは、署で話す」

分かりました。と、言つて、電話を切った。急いで署に行こう、と電車に駆け込んだが、……駅員に怒られて、むしろ遅くなくなってしまった。

テレビのニュース番組を見ている。アナウンサーの淡々と喋る言葉の一つ一つが、心に突き刺さった。

「昨日の午後8時ごろに、暴力団関係者の松坂豪さん（37）が路上で死亡していた事件で、頭に殴打された痕跡があることから、警察は殺人事件とみて捜査をしています。では、次の事件です」

殺人事件。そうだ。俺は、人を殺したんだ。死んで償おう。その前に、警察に事実を伝えよう。ワンコールで相手はでた。はきはきとした男の声。少し、年をとっていいそうだ。

「もしもし」

「はい、こちら110番。なにかありましたか？」

「あの……自分、人を殺してしまいましたので、お電話差し上げたのですが」

「殺人？詳しく話してください」

一言話すごとに相手の声は、厳しくなっていく。電話で罪を言い終わると、ホームセンターに行つて、ロープと、釘を買つた。レジの人は、不審げに顔を見たが、会計を終えると、心にもない声で、ありがとうございましたと言つた。

チェーンロックをかけて、釘を壁に数本ほど打つ。そして、ロープをかけた。最終段階だ。自殺を実行する。息を吐いて死をカウンtdownする。3, 2, 1 0。ぐつと気管が絞まる。意識が消える前に、こう思った。走馬灯、視れなかつたな、と。

被害者？2

被害者……石間和人

死因……首つり自殺

凶器……ロープ

石間和人。死亡のため、賞金は無効。殺害数2人。

「自殺？」

里美は、驚いた。

「ああ、容疑者は、自殺した」

課長は、胸ポケットから、煙草を取り出した。

「なぜ、自首した後に、自殺をしたんですか？」

「そんなのこつちが知りてえよ。何だつてんだ、まったく」

里美は、深呼吸をして気を落ち着かせようとするが、課長の煙草の煙で噎せてしまった。咳が、やっととまった。涙が、溜まっている。よし、こういうときは、深呼吸だ。

……また、噎せてしまった。

「まったく……学習能力あるのか？そんなんじゃないやあ、念

願の刑事になれねえぞ」課長が、呆れた目でみている。

「いや、もうなつていますから」

「それはそうとして、これは、多分迷宮入りだぞ。容疑者死亡だからな」

「今、無視しました？ しましたよねえ？」課長が、里美に煙草の煙を吐き出した。また噎せ、恨みのこもった視線で、課長を見た。そしてなにか思いついたのか、光った目で、言った。

「まったく、そんなことばかり言っていると、お嫁さんに逃げられますよ？」

「女房には、1ヶ月前に逃げられたよ」

何を言えばいいのだろうか。

「えっと、ご愁傷様です？」

「……………」課長は、無言だ。

「なんか……………」すいません」

「……………」

「さて、撃沈している人は、放っておいて、なにか分かった？」
里美が聞くと、どもりながら、捜査員が言った。里美は、かなり美人である。

「は、はいっ！ 石間和人は、そのホームセンターで、釘とロ―プを買ったみたいです」

「ふうん、そう」

素っ気ない返事を返す。捜査員は、嫌われているのではないかと内心思うが、里美は、気にしなかった。

「そういえば、課長、大丈夫ですか？」

「いや、だめだ。もう、俺のガラスのハートが粉々だ」

「それだけ言えれば十分ですね」

「ああ。あれは嘘だしな」

しれっと嘘発言をする課長。

「心配して損したじゃないですか」

「まあ、おそらく、刑務所に入りたくなくなつたんじゃないか？」

「じゃあ、自首しなきゃ良かったんじゃあ？」
さりげなく話題を変えられたことに、里美はまったく気がつかない。

「良心が痛んだんだろ」

部長が話し終えた時、無線機から連絡があった。

「市 から、緊急要請。ただちに収集せよ」

パトカーへすぐに乗り込み、サイレンを鳴らす。周りの車が、端に寄っていくのは、見ていて中々の爽快だ。実は、警察になったのはこれも目的の一つだったりする。自分でも刑事としてどうなの、と思った。

目的地につくときには、12時を少し過ぎていた。ちょうどお昼だが、食べる暇はない。

「ここで何がおきたんだ？」と、課長。

「知りませんよ。人の昼飯を邪魔しやがって」

「お前、口悪いよ？どうにかしたらどうだ？」

課長が言うが、知ったことじゃない。

「食べ物への恨みです」と、親切に答える。

「確かに、お前、食い意地が張ってい……」

ボディブローを課長の腹に決める。顔面に入れなかった私を褒めてあげたい。このデリカシのなさには、逆に感心する。

「ぐっ……馬鹿力だな、おま……」

「女性に言っていていいことと、悪いことが、あります」また、同じところに入れた。

「まったく、少しは、課長を崇めろ」

「あなたが課長になっているのが、不思議でしょうがないです。デリカシーの欠片もないです。後、課長を崇めるぐらいなら……」

「……何でもありません」

「本当は、崇めたいんだろ？無理しなくても……」同じところに、里美の拳がある。また、うめき声があがった。

「あ、巡査長、何がおきたんですか？」這いつくばっている課長は、綺麗に無視し、巡査長に尋ねる。

「殺人事件だ」

「殺人事件？二人目ですか？ここ最近、殺人事件多くないですか？」

「まあ、二件目だが、異常だな」と、巡査長。

「呪われているんじゃないか？」いきなり復活した課長が、言った。

「縁起が悪い、やめてください」呪い、と聞いて少し怖くなった里美が言った。

「おお、女々しい。お前、男じゃなかったのか？」本日四度目のボディブローが炸裂した。「こんなのだから男って言われるんだよ」と言った課長に、5回目、当たった。

「課長、漫才もどきはやめましょう」

「おお、そうだな」

「ええと、捜査しますよ？」完全に空気になった、巡査長が、言った。

「あれ？お前いたっけ？」課長が、発言する。

「……課長……」涙をぬぐう演技をする巡査長。30代のおじさんのその様子は、はっきり言って、気持悪い。

「被害者は、斎藤麻里さんです。24歳で、刺殺されたみたいですよ」気を取り直した巡査長が言った。そうか、と課長が言った。課長は、里美をからかうこと以外では、至って真面目である。

唐沢雄太は、ひどく喜んでいた。やっと、ボスから殺人の許可をも

らえた。そうと決まれば、と唐沢はネットの通販でナイフを買った。架空の名義で借りたアパートへナイフを送らせ、そこに取りに行った。遠くに行った場合、かえって疑われるため、近くで殺すことにした。

ナイフを持ち、午後8時ごろに街に出た。昼でさえ暗い路地につくと、そこで、獲物を待つことにした。1時間半ぐらいで獲物はききた。若い女だ。殺せる、と確信し、興奮した。やっと、殺せる。いきなり飛び出して、タオルで口をふさぐ。後は、ナイフで刺すだけだ。つ、つ、つ、とナイフを滑らせ、胸の所に持って行った。予想外の反撃がおきた。女が、タオルを引っ張って逃走を試みたのだ。無駄な抵抗を、と唐沢は微笑した。女の力で俺の力に、勝てるはずがない。

もう、いいよな。殺して……心音が大きくなる。ひと思いに殺ってやる。力を込めた。少しの抵抗のあと、皮膚が、肉が裂けた。暗くてよく分からないが、黒い液体が見えた。もう、死んだらうか？

ありがとう。少しの間だったけど、楽しかったよ。

被害者？3

被害者……斎藤麻里

死因……刺殺

凶器……果物ナイフ

唐沢雄太。殺害数2。賞金100万円。

始まり（後書き）

唐沢の殺害数が2なのは、過去に1回殺しているからです。

4人目

一人目を殺した後、10日後に殺人を執行することにした。同じ場所は、警戒されていると思い、上空写真を見て、気がなさそうな所を探した。あつた、ここだ。

下調べをするために、電車に乗った。アナウンスがなり、最寄りの駅に着いた。切符を改札にいれ、駅を出る。

その公園は、昼だというのに、人がいなかった。いいぞ、ここなら、殺れる。問題は、何で殺すか、だ。絞殺でいいかな、いや、撲殺か？ やつぱり、絞殺がいいか。

息を潜め、隠れる。来た　今回も、女だ。ロープの上で指を滑らせる。

「そこまでだ。唐沢雄太、殺人の容疑がお前に掛かっている。署まで来て貰おうか」

男の声が聞こえる。見れば、女も男も銃を構えていた。

「何故分かった？」

と聞いた。

「彼女の爪に、お前の皮膚が付着していた。昔、殺人を犯しただろう？ その時の手口と非常に似ていたからな。お前の皮膚をその時に取っておいたんだ。ああ、こいつは、また殺るな、と思ったからな。その皮膚同士をDNA鑑定してもらったよ。89%一致だつてさ。ああ、山川、こいつに手錠をかけて」

「よせ、やめろ、俺はまだ殺し足りないんだ……………血……………血……………血……………血……………血……………来るな、来るなああああ！」

後ろに下がる。フェンスを越そうと思った。こ……………した？ 妙な浮遊感。ばちゃん、と水の跳ねる音。何で？俺は、水に浸かっていた。そしてそのまま流される。落下。最後に俺の聞いた音は、がしゃん、という自分の首が折れる音だった。

被害者？4

被害者……唐沢雄太

死因……落下の衝撃による首の複雑骨折

凶器……水

唐沢悠太。殺害数3。死亡のため、賞金は無効。

「あゝあ、死んじやいましたかね……………」

と私が言う。

「ああ、死んだだろうな」

と、課長。

「それにしても、殺人者って良い死に方しませんね」

石間和人にしても、唐沢雄太にしても、良い末路にならない。

「まあ、そうだな。ああ、一応パトカー呼んどいて。俺が救急車

呼ぶから」

110番をする。

「はい、こちら110番」

「あー、私、山川里美よ。唐沢が、死んだみたいで」

「は？死亡？」

動揺した声。

「うん」

「はあ、じゃあ今行きます」

数分後、パトカーと救急車が来た。

4人目（後書き）

何この話……。。。。。。書きにくっ！あゝあ、居場所のほづが2
倍は書きやすい……。。。。。。。

放火は？

東村大介は、どうすべきかを悩んでいた。捕まると、『あの事件』のこともあるから、結構な刑期だろう。しかし、やんないとボスに殺される。長年の勘からして、あの目は、真剣な目だ。おそらく、殺人は躊躇わないだろう。

捕まらない為の、プランを練る必要がある。

放火……。それだと、直接人を手にかけるわけではないから、ボスが何を言うか。しかし、これなら5人殺すのは、簡単だ。「今日は、菊池さん？ああ、あの、ボスに回してください」

迷ったが、電話の方が良いと判断した。放火をして、駄目だと言われたら、デメリットが大きい。そして、なにより、大介はあそこの空気に耐えられない。

「ボスに？なんで」

不審そうな声。しかし、悟られるわけにはいかない。

「1か月前の件と言っていただければ」

「ふうん、俺には教えてくんないんだ」

いくら先輩の頼みともいえども、こればかりは駄目だ。

「すいません。4人だけの秘密なんで。ボスと、自分と唐沢先輩と石間先輩だけの」

驚くべき答えが、返ってきた。

「ええ？あの2人、死んだよ？」

がり勉石間と、バカラ沢。それが、大介のあの2人にたいしての渾名だった。

「が、石間先輩と唐沢先輩が？」

危なく、言葉に出してしまうところだった。しかし、がり勉はともかくとして、バカラ沢は簡単に死ぬ奴ではないのだが。

「うん。まあ、ボスを呼んでくるよ」

「ええ、お願いします」

何故、あの2人は死んだのだろうか。考えていと、低い声が耳に入った。

「大介、どうした？」

「あの、放火も数に入るのかって思いました」

しばらくの間。おそらく、思案しているのだろう。

「いや、入らない。直接、殺れ」

やはりか。

「あの2人は、死んだが、お前には期待しているよ」

「ありがとうございます。では、要件はそれだけです」

そう言ったら、電話は切れた。

さて、どう殺すか。刺殺、絞殺、轢殺。大介の頭は、すでに回転し始めていた。

放火は？（後書き）

やったぜ、久しぶりの更新よ？

男と女を混ぜてみましたゴンギツネです。

読んでくださった方、ありがとうございます！

一酸化中毒を目指そう！（前書き）

おまたせしました。申し訳ありません。

一酸化中毒を目指そう！

決めた結果、一酸化炭素を使うことにした。一酸化炭素、CO。ヘモグロビンとの結びつきがよく、少量でも死亡するという。この一酸化炭素を、使った自殺もあり、使い勝手も良い。しかも、顔が赤くなるだけなので、なかなか発見できないという利点もある。わざわざ死体解剖されることもないだろう。

大介は、ビニールに一酸化炭素を注入し、その穴をガムテープで覆った。あとは、このビニールを人に被せるだけである。空気より軽いため、覆うときにヘマでもしない限り、漏れる心配は少ない。殺人のためには、女を選ぶほうが良いだろう。カモ男よりはない体が細かいからビニールも被せやすい。(プロレスラーなど、格闘技をやっている場合は分らないが)

そのためには、待つ必要がある。怪しまれない程度に、どんな人が、いつ来るかを2週間位張り込んだほうがいいだろう。暗い路地を2時間ほど探すと、見つかった。大介は、あの事件のことを思い出していた。あの事件も、暗い場所で起きたのだ。

私立都賀田高校は、偏差値がそう高くはない高校で、かなり荒れている高校だった。大介は、喧嘩は嫌いだったが、腕っ節はかなり強かった。なので、しょっちゅう喧嘩に引っ張り出されては、相手を叩きのめした。

あの時も。

あの日は、雨が降っていた。思えば、あれも事件が起きる予知前兆だったのかもしれない。

「おい、また大島が俺のダチに絡んできてよおー。東川、お前も来てくれないか？」

青木和義という人物が近寄ってきた。

「断る。お前らだけでやっている」

「いいだろ？友達じゃねえか」

こいつは何故、こんな不良っぽい言い方をしてくるのだろうか。俺のほうが、強いはずなのだが。

「頼むよ、だ・い・す・け・く・ん・お・ね・が・い？」

「ウザイ」

切り捨てた。これで諦めてくれればいいのだが。しかし、その願いは叶わなかった。

「あれえ？いいの？お前が万引きしちゃったこと言っちゃって顔から、血の気が引いた。いつバレたのだろうか。」

「いつ……いつ見た？」

きやははっ、という耳障りな笑い。

「釜をかけただけ。やっぱりやったんだ。ねえ、来てよ、だ・い・す・け・く・ん・お・ね・が・い？」

こいつ……。しかし、怒りを悟られる訳にはいかない。しかも、もしこいつがなにかの気まぐれで誰かに言ったら、警察にマークされてしまう。殺すか。それが一番良い方法だった。

大島が来るといふ、1時間も早く裏路地に着いた。大介は、隠し持っていたハンマーを思いつきり、青木の頭に叩きつける。すると、彼の頭は、血で赤く染まった。テレビで、髪を赤く染めている芸能人がいることを、関係のないこの場所で思い出した。

改めて、青木の顔をじっくりと見る。すると、青木の瞼が軽く痙攣した。まだ、生きているのか。甘かった。見ていなかったら、少年院に行っていたかもしれない。少年法。なんとも無駄な制度だろうか。大人も子供も罪は罪。同様に裁くべきであろう。最も、その少年法に救われているのは、俺もだが。

青木の頭を、もう一度ハンマーで殴った。更にもう一発。硬い物が割れるような音がして、同じ場所をまた殴ると、柔らかい感触。これで生きていたら、人間ではない。不思議と、良心の呵責や、殺人の葛藤などは感じなかった。自業自得である。

さて、後片付けをしなければならぬ。まずは、駅前で貰ったテ

イッシュペーパーでハンマーに付いている指紋を拭きとった。そして、血をもう一度つける。これで、犯行に使われたハンマーということになる。そして、返り血を浴びた靴を拭いた。

裏路地から出る。改めて、計画を見直す。そして、忘れていたことはいかを確認める。計画に穴はなかった。シンプルイズベスト（簡単なものの方が分かりにくい）。これで大島がハンマーに触れたら良いのだが。青木は、大島と喧嘩をすると言いふらしていたし、あちらも同じであろう。あちらに、罪をなすりつけることが出来れば。

記憶のフラッシュバックが起きている間に、かなりの時間が過ぎていた。20時11分から22時58分までに、4名通り、その時間間隔は、上から、10、29、34、36である。34分の人を狙おう。しかし、計画に支障が出てはいけない。念のために、ブラックジャックを用意しておこうか。大介は、口元に小さな笑みを浮かべると、すぐに表情を元に戻した。

一酸化中毒を目指そう！（後書き）

ワード1枚と半分です。

PDF小説ネット発足にあたって

PDF小説ネット（現、タテ書き小説ネット）は2007年、ルビ対応の縦書き小説をインターネット上で配布するという目的の基、小説家になるうの子サイトとして誕生しました。ケータイ小説が流行し、最近では横書きの書籍も誕生しており、既存書籍の電子出版など一部を除きインターネット関連に横書きという考えが定着しようとしています。そんな中、誰もが簡単にPDF形式の小説を作成、公開できるようにしたのがこのPDF小説ネットです。インターネット発の縦書き小説を思う存分、堪能^{たんのう}してください。

この小説の詳細については以下のURLをご覧ください。
<http://ncode.syosetu.com/n8219x/>

殺人者には100万円

2011年12月2日17時55分発行